石川県立美術館だより

平成19年2月1日発行　第280号

◎緑地桐鳳凰文唐織　― 能面と能装束 ―

画室にて　― 高光一也　画業60年の軌跡 ―

特集

能面と能装束

2月8日(木)～3月4日(日)
会期中無休

高光 一也
画業60年の軌跡

2月8日(木)～3月4日(日)
3月7日(水)～3月25日(日)

目 次

能面と能装束……2
高光一也　画業60年の軌跡……3
伝統九谷焼工芸展30年の精華……3
コレクション展示室主な展示作品……4
展覧会回顧（大場松魚展）……4
講演会記録（人間国宝座談会）……5
19年度友の会会員募集……6
企画展示室、各地の展覧会……7
行事案内……7
所蔵品紹介、ショップ通信……8

URL　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

今月のコレクション展示室
（前田育徳会展示室、第2展示室）

特 集
能面と能装束

2月8日(木)～3月4日(日) 会期中無休

昨秋、金沢市広坂に新しく金沢能楽美術館が開館したことによって、金沢が「加賀宝生」と称されるように、江戸時代の頃から能が盛んな土地であることが、改めて広く知られるようになりました。本館においても、前田育徳会と本館が所蔵する能面と能装束を、年に一度、約一か月間に限って公開していますが、これを機会に更に多くの方にご覧いただきたいと願っています。なお、本館は今秋より改修期間に入りますので、今回が休館前最後の能面と能装束コレクションの公開となります。

◆能装束

前田家に伝わる能装束の中で、最も豪華で美しい唐織といえば、**紅地開扇亀甲模様唐織**（写真）です。花紋の入った亀甲模様を背景に、扇面が全体に配されています。扇面には、桜や青梅、鳳凰といった模様が鮮やかに織り出されていて、ひとつひとつ配色が異なっていることも見事です。装束に赤色が用いられた紅入の装束は若い女性役に用いられ、本唐織は〈蟬丸〉のシテに用いられました。

本館に所蔵される能装束にも、前田家に伝来した美しい縫箔があります。**鶸茶地型紙花紋散縫箔**（写真）は、珍しい鶸茶地の繻子地に、四季の草花を刺繍した丸型・角型・扇面型の模様が全体に配された能装束です。模様は一つ一つ異なっており、それぞれの美しさを楽しむことができます。〈求塚〉〈桜川〉のほか、老女物、童子の面を用いる少年役がふさわしいとされました。

能装束には、このように多彩な模様を織り出した唐織や、箔と刺繍によって模様を表した縫箔のほか、摺箔や厚板、広い袖が特徴の狩衣や長絹などさまざまな種類があります。多種多様な能曲や、鬼神や老若男女を演じ分けるために、既に室町末期には今日とほぼ変わらない種類の能装束が存在していたといいます。いずれも公家の日常服や武家の服装が変化、あるいはそのまま転用され、能装束として発展していきました。

◆加賀藩の能

江戸時代の能が「武家の式楽」と称されるように、能役者を抱えた諸大名は、競って能装束を揃えました。加賀藩前田家では、五代藩主綱紀以降宝生流を採用し、宝生分家である宝生嘉内家を召し抱え、幕末まで至りました。こうした藩主の宝生贔屓が現在も「加賀宝生」と称されるゆえんです。

十九世紀はじめに藩主であった斉広（十二代）・斉泰（十三代）は、特に能を演じることを好み、様々な能装束を整え、金沢城内や斉広の隠居場所であった竹沢御殿で演能を繰り返したという記録が残っています。今日、育徳会や本館に伝わる能装束のほとんどが、この時期に仕立てられたと考えられます。中には稽古用のみに用いられた装束や、同じ図柄の装束を複数揃えていた例もあり、いかに大量の能装束を所有していたかがうかがえます。

◆能面

能面もその種類は豊富です。鬼神、老若男女というだけでなく、男性面は品格に応じて使い分けられ、女性面、特に若い女性の面は流派によって異なっています。桃山時代頃には六十種ほどであった能面は、時代を経るにつれて増え、現在は二百種とも言われています。

前田育徳会に伝わる能面にも独特のものが見受けられます。特に鬼神面が特徴的で、しかめた表情が特徴の**夜叉**、鬼と化した女性の姿である**真蛇**、口をきつく結んだ表情を持つ**小癋見**が優れています。

本特集では、こうした能面十九点と能装束十七点を紹介します。重要文化財の**緑地桐鳳凰文唐織**（表紙写真）も公開します。なお、会期中の二月十日（土）午後一時三十分より、展示室にてギャラリートークを行います。能面と能装束の見所について、前田家や金沢の能に関する話を交えながらご案内しますので、多くの方々のご来館をお待ちしております。

今月のコレクション展示室
（第4展示室）

特集

高光 一也 画業60年の軌跡

2月8日(木)～3月4日(日)
3月7日(水)～3月25日(日)

子供と裸婦　昭和30年

馬に凭る（B）　昭和55年

本年は明治四十（一九〇七）年一月四日に生まれた故高光一也氏の、生誕百年の年にあたります。そこで記念事業の先陣として、館蔵の高光一也作品の中から画業六十年のあゆみのエッセンスをご覧いただけるよう、各時代の作品をピックアップして、表題の特集展示を第4展示室において開催いたします。

高光氏は金沢市北間町の専称寺住職高光大船の長男として生まれ、昭和七年に帝展初入選を機に同寺を継ぎ、僧侶と洋画家の二つの道を歩むことを決意します。著書に『近作画集と歎異鈔ノート』がありますが、拝読しますと高光氏の内部でその二つの道が緊密に結びついていることがうかがえます。また画業のテーマが裸婦と女性像で、そのいずれもが屈託のない明るい表情を見せ、健康美に溢れたものであることは、高光氏のユーモアたっぷりで聞くほどに元気が出る法話と直結していると思われるのです。。

さて、高光氏の画業の歩みは昭和という時代と共にありました。昭和初期のモボやモガの闊歩する時代には、瀟洒な都会のモダニズムに対抗し、付近の農婦たちが憩う群像を大作に描き、戦時中は写実の腕が高く評価されて、戦争記録画制作のため戦地に赴き、戦後抽象画全盛の時代には秀麗な描写力を捨てて、幾何学的な人体像に挑みました。明治四十年前後に生まれた洋画家たち、なかでも抜群の描写力を持った人物画家たちに共通する、時代の波との戦いであったと言うべきでしょう。

一つのスタイルに画家が安住することはありません。それゆえ、見る側は、実に多彩な画業の数々に驚き、出会いを楽しむこととなります。この特集が、高光一也という偉大な画家を知る好機となることを願っています。

なお代表作を網羅し高光氏の全貌をご覧いただく特別展は、四月二十二日から五月二十日にかけて開催いたします。

主な作品

ミシン台の婦人　昭和8年	雪人夫　昭和38年
画室にて　昭和21年	フードの女Ⅰ　昭和47年
立つ裸婦　昭和26年	馬に凭る（B）　昭和55年
子供と裸婦　昭和30年	

昭和五十一年六月八日、石川県が誇る伝統工芸品である九谷焼について、その技術保存と発展向上を図るため、九谷焼技術保存会が石川県無形文化財として指定され、六名が技術保持者として認定されました。

翌五十二年に、この九谷焼技術保存会の重要な事業として、第一回の「伝統九谷焼工芸展覧会」が開催されました。同展は以後毎年のように開催され、第三回の折に名称を「伝統九谷焼工芸展」と改めて今日に至っています。本館との関わりも長く、第三回から第七回は旧石川県美術館で、そして第八回以降は本館で開催されています。

今回の特集は、この「伝統九谷焼工芸展」が今年第三十回の節目を迎えたことに因み、本館が所蔵するこれまでの受賞作、出品作を中心に約五十点を前期と後期にわけて展示するものです。古九谷を源流とする九谷焼は、技法、様式のいずれにおいても、常に創新の精神を追求してきました。その姿勢は今回展示されるすべての作品に認められるものであり、それぞれの作家が「九谷」への熱い想いを創作の原動力とした独自の作風を打ち出して伝統と対峙していった軌跡をたどることができます。

前期の作家の構成ですが、重要無形文化財保持者（人間国宝）の三代徳田八十吉、吉田美統の両氏をはじめとして、現在の九谷焼技術保存会会員の北出不二雄、高木松生、武腰潤、田村敬星、中田一於、福島武征、松本佐一、宮川哲爾、吉田荘八の各氏。また物故会員として、竹田恒夫氏。そして、伝統九谷焼工芸展の出品作ではありませんが、この展覧会の歴史にとって欠くことのできない作家として、中村翠恒、二代徳田八十吉の両氏もあわせて紹介します。

今回の特集をとおして本県の九谷を基盤とする陶芸界の力量、そして層の厚さを改めて感得していただけるものと思います。

釉裏金彩秋草譜飾鉢
昭和57年第5回
伝統九谷焼工芸展優秀賞

（第5展示室）

特集

伝統九谷焼工芸展 30年の精華（前期）

2月8日(木)～3月4日(日)
3月7日(水)～3月25日(日)

静止した刻　鴨居　玲

六勝屏風（部分）　吉田北辰

今月のコレクション展示室

主な展示作品

2月8日（木）～3月4日（日）

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財

前田育徳会展示室・第2展示室

能面と能装束
前田育徳会展示室
能面　夜叉
能装束　紅地開扇亀甲模様唐織
能装束　花色地色絵花唐船模様縫箔

第2展示室
◎能面　翁
◎能装束　緑地桐鳳凰文唐織
能装束　鶸茶地型紙花紋散縫箔

第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第3展示室

【油彩画】
静止した刻　鴨居　玲
若い客　竹沢基
ティチーノ寸景（スイス）　田辺栄次郎
熱叢夢　宮本三郎

【彫塑】
口笛　宮地寅彦
座る女　森　豊一

第4展示室

高光一也画業60年の軌跡
ミシン台の婦人　昭和8年
画室にて　昭和62年
立つ裸婦　昭和26年

第5展示室

伝統九谷焼工芸展30年の精華
青手小禽文飾皿　北出不二雄
金襴手魚文飾皿　高木松生
雲中麒麟図扁壺　武腰　潤

第6展示室

【日本画】
集る　下村正一
春を待つ　滝川真人

【書】
行觴　鈴木翠軒
六勝屏風　吉田北辰

◆観覧料

	個人	団体（20名以上）
一般	350円	280円
大学生	280円	220円
高校生以下は	無料	無料

展覧会回顧

卒寿記念
大場松魚展　9月28日～11月12日

蒔絵の重要無形文化財保持者（人間国宝）である大場松魚氏の卒寿を記念して開いた今回の特別陳列は、大場氏がこれまでに制作した多くの作品の中から、棚十基を全て鑑賞できることをメインに、大場氏の初期作品の日展出品作品をはじめ、昨年度の日本伝統工芸展出品作の棗までの全31点（11月1日より33点）と、大場氏に師事した5人（小柳種圓、中野孝一、向井武志、市島桜魚、砺波宗斎）の作家の作品15点を展示しました。

十基の棚のうち二基は企画展「松田権六の世界展」に出品されていたため、企画とあわせて鑑賞できるということでしたが、松田権六展終了後に十基全てを一室で展示することが出来ました。初日には、展示室でずらりと並んだ棚を前に、大場氏は「こんなものをつくっていたのかと不思議な思い。でも、それぞれに思い出がある。棚をつくるのには体力もいるがまたつくりたい。100（歳）の棚なんてどうや。」とお話されておいでました。棚は、十基どれひとつ同じものはなく、大胆かつ繊細な作品からの迫力に、訪れる方々を大いに魅了しました。

また、先生の展覧会としては久しぶりに日展出品作の漆芸扇風器を展示することが出来、先生が一枚ずつ糸鋸で切って組み立てた波模様の笠や、モーターをカバーするためという蒔絵部分に、展覧会を鑑賞に来た学生等、若者たちから「おしゃれな感覚で現代オブジェのような面持ちがとても素敵。インテリアとして部屋に飾りたい。」という感想をたくさんいただきました。この扇風器は展覧会準備のために先生のご自宅で扇風器のスイッチを入れたのですが、周りの書類を吹き飛ばす勢いが今も健在でした。このほか常連の方々からは「久しぶりに先生の扇風器やラジオボックスに会えました。」という声もいただきました。ありがとうございます。

最後に、本展開催にあたりご協力いただきました先生をはじめ関係の方々、また会期中ご多忙の中ご鑑賞いただきました多くの方々に改めて深くお礼申し上げます。

講演会記録　座談会「人間国宝 松田権六を語る」

出席者：川北良造氏、前史雄氏、小森邦衛氏、　司会：嶋崎丞当館館長

嶋崎館長：権六先生の没後20周年記念ということと、文化財保護法の中で、重要無形文化財制度の50周年記念で、松田権六先生の展覧会を開催いたしております。その一つの記念行事といたしまして、松田先生になんらかのかかわりを受けておられた、特に作家先生方を中心に、今日は松田権六先生を語るというテーマで話し合いを進めていきたいということでございます。今回の参加は、平成6年木工芸で重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝に認定されました川北良造先生、平成11年に沈金の分野で重要無形文化財保持者に認定されました前史雄先生、今年度の髹漆の分野で重要無形文化財保持者に新たに認定されました小森邦衛先生でございます。先生方に最初の出会いと申しましょうか、その出会いを通して先生に対してのどのような印象をお持ちになったかというのをざっくばらんにお話いただければと思います。

川北氏：私の場合は昭和36年になりますが、その前にもう私の親は日本工芸会という会派に入会をさせていただいておりました。それで松田先生から突然お手紙がまいりまして、料理屋さんで使うお膳からお椀一式をつくりたいので協力をして欲しいと。当時はまだ山中温泉には電車が通っておりまして、そして何時何十分の電車に乗りなさい、大聖寺駅では何時の列車に乗り換えなさいと、ほんとにこと細かく記されたものをまた後から送ってくださって、案内のとおり出向いておりました。駅へ到着した材料の桧を見て私ども仰天しました。貨車にもうこれ以上積めないというほど山盛りに木曽の桧の原木が山積みにされて駅に来ていました。今はレッカー車とかいろんなものがありますが、当時そういう機械は全くありません。私の友達10人あまり力を貸して欲しいとお願いに行き運びました。その材料を使って皆さんもいま会場でご覧いただいたと思いますが、同一材を使って展観されております。その当時の仕上げた桧の白木地です。これもそういうことで私は大切にこれを保管しておきました。私の友人が5・6年前に松田先生のこういうものが手に入ったと私に届けてくださった。見ましたところ、私が大事にしておりましたこの材料と一緒なものがこの目の前にありまして、私、大変感激しました。これが私の手元へ来てくれたか、そういう大きな思いでここに手持ちとしてあります。

前氏：輪島の漆芸技術研修所、これが昭和42年に設立されたわけです。もう40年近いのですが。その少し前ですね、松田先生が輪島へいらっしゃって、当時、先生とはうちの父大峰がお付き合いがありました。実際私が松田先生とお会いしたのはちょうど昭和42年にできました研修所のそのあたりからです。松田先生が輪島へ研修所のご指導においでたとき、ちょっと夜お泊りのホテルのほうへお伺いする了解をいただいて、夕食後約6時間、夜中の2時までですね、漆の作家としての心構えとでも言いますか、人とかものとか、それから古典ということですね、古いものをよく見て勉強しなさいそういうお話をいただきました。そのあと、何度も父と一緒に、東京のお宅へ伺ったりとかいたしましたけれども、一口にどういう人かと聞かれましたら、どなたかちょっと本に書いておいでましたけれども漆のような人という感じがしますね。非常に当たりはやわらかいのですけれども、そのあといったん固まるとびくともしないという信念を持った方といいますか。

小森氏：川北先生も前先生もお話されたように、かなり偉い先生方はぴりぴりしていたというのはよくわかりました。私は、研修所に入ったのが第2期生でございまして、私自身は若かったせいもあって、怖いというイメージは全くありませんでした。講義をしていただいていても、生徒は前のほうに割りと気楽に話を聞いていたように記憶しております。2日間あるうちの一日は講義で一日は直接的に自分たちの仕事場の前に座って教えていただいたわけですけれども、ただ、デザインという形で棗に模様をつけて図を先生のところに送ってみてもらう、そうすると先生からその批評を一筆添えて帰ってくるわけですね。その中では、まず、木地の棗の形を、ということを毎回毎回言われました。

また、私が卒業した後で研修所のグループ展を作って、それで東京で展覧会をやろうということで、恐れ多くも松田先生に会の名前をつけてくださいとお願いに行きましたところ松田先生は選んであげるからみんなで考えた名前を持ってこいとおっしゃって、誰がつけた名前なのか今ではさだかに覚えは無いのですが、漆が光る会だから漆光会というこの名前が良いだろうと。漆光会を立ち上げるときに先生のお宅へ何度かお邪魔したというのがどちらかというと漆芸家としての、社会人としての最初の機会じゃなかったかなという風に思っておりますけれども。

（「松田権六の世界」にあわせまして、10月15日（日）に当館ホールで行われた座談会内容を当館の責任で要約したものです）

平成19年度　友の会会員募集

3月1日(木)から受付開始!!
郵便でのお申し込みは郵便振替で

平成19年度友の会会員は次の要領で募集いたします。**現会員の方で継続をご希望される場合でも、改めてお申し込み下さい。**お申し込みがない場合はそのまま退会となります。

※平成19年9月3日から平成20年9月下旬まで（予定）、改修工事のため休館となりますので、会員証の有効期限は**平成19年4月1日から21年3月末日までの2年間**となります。

①募集定員　1,500名

②会　　費　2,000円

③受付期間　3月1日(木)より開始し、募集定員に達し次第締め切ります。
3月5日(月)・6日(火)・26日(月)～31日(土)は展示替えによる休館日ですのでご注意下さい。

④入会手続き

次のA、Bいずれかの方法でお願いいたします。

A　当館へご来館になり、受付へお申し出下さい。
会員証はその場で発行します。

当館中央ロビー奥の**図書閲覧室で受付**いたします。入会申込書は閲覧室内にも常備してありますが、現会員の方は今回同封の入会申込書に所定事項をご記入の上、会費（現金）とともにお出し下さい。

◇受付時間は、**休館日を除く午前9時30分から午後5時までです。**

B　郵便振替用紙をご利用下さい。
会員証は3月末以降に4月号の美術館だよりと共に郵送します。

同封の郵便振替用紙に所定事項をご記入の上、最寄りの**郵便局窓口**へお出し下さい。

郵便振替口座　00700－7－46490
加 入 者 名　石川県立美術館友の会

◇払込料金70円は申込者負担となります。

◇会員証は4月号の『美術館だより』と一緒に、3月末頃からお送りする予定です。

◇白色の図書閲覧室受付専用用紙や返信用封筒、返信用切手は必要ありませんので、郵送しないで下さい。

◇郵便用紙の受領証は、会費送付の証明となるものですから、お手許で大切に保管しておいて下さい。

◇郵便局備え付けの振替用紙をご使用の場合は、通信欄に下記事項をご記入下さい。
年齢、性別、会員の区別(継続・新規・元)、職業、継続会員の方は現会員番号

⑤その他

◇会員証の有効期間は本年度に限り平成19年4月1日～21年3月末日の2年間です。

◇会員は記名者本人のみとします。（ご家族の方との連名受付はいたしません。）

◇一度納入された会費は、お返しいたしません。

◇会員証紛失による再発行は受け付けません。

会員の特典

◎当館コレクション展に何度でも無料で入場

受付での会員証の提示により、会員本人のみ、21年3月末日まで何度でも無料で入場できます。

◎当館企画展入場券

この観覧券で4月に開催する当館春の企画展「高光一也の画業－モダンの煌めき－」に無料で入場できます。

◎本年度の当館企画展の開会式にご招待

◎入館料の割引

①受付での会員証提示により同伴者2名まで当館主催展覧会（当館コレクション展、企画展）観覧料が団体料金なみに割引されます。

②**石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館、石川県九谷焼美術館、石川県能登島ガラス美術館、金沢21世紀美術館**の各館が主催する展覧会および、常設展でも、会員本人のみ割引が適応されます。

◎当館主催諸行事への参加

現地見学やバスツアー、ギャラリートーク、ミュージアム・コンサート等の諸行事に参加できます。

◎『石川県立美術館だより』の郵送

当館の最新情報をお伝えする『石川県立美術館だより』（毎月1日発行）が毎月郵送されます。会員を対象とした行事のお知らせも掲載されています。

企画展示室

第14回北陸国画グループ展

2月9日（金）～13日（火）〈第7～9展示室〉

北陸国画グループ展は、毎年、5月に東京で開催される国展（国画会主催）に出品する北陸在住者および、ゆかりのある出品者で構成されています。国画会は、本年で第81回を迎える日本を代表する伝統のある公募団体で、今春から本展は六本木の新国立美術館にて開催されます。

絵画部は安達博文、大森啓、柏健、堤建二、長谷川宏美、開光市、前田昌彦ら国画会会員7名を含む26名、写真部は国画会会員の冨岡省三ら29名が参加し、それぞれ力作を2～3点ずつ発表します。今回のフリースペース展示では、柏健の作品がまとめて展示されます。是非ともご高覧くださいますようお願い申しあげます。

◇入場無料

◇後　　援　北國新聞　テレビ金沢　エフエム石川

◇連 絡 先　事務局:河北郡津幡町七野107-1　本田正史
TEL　076-288-1819

第30回金城大学短期大学部美術学科卒業制作展

2月16日（金）～19日（月）（第7～9展示室）

本学美術学科の卒業制作展は30回目の節目となりました。今年度はデザイン28点、マンガ・キャラクター25点、日本画18点、油画22点、染織・ファッション16点、陶芸・オブジェ2点の合計111点を出品予定です。また、各コースの研究生12名の作品が加わります。

是非ともご高覧の上厳しいご批評をいただければ幸いです。

◇入場無料

◇連 絡 先　金城大学短期大学部美術学科　林　可耕
TEL　076-276-4411

金沢大学教育学部美術教室卒業・修了制作展

2月22日（木）～25日（日）〈第7展示室〉

絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術教育の各分野の学部、大学院生による平成１８年度卒業・修了作品を展示します。これらは、教員のほか、多様な分野へ進出を目指す学生達が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、且つ創造的に研究し制作して完成させたものです。展示点数は数十点、是非ご高覧下さい。そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いします。

◇入場無料

◇連 絡 先　金沢市角間町
金沢大学教育学部美術教室　松浦　昇
TEL　076-264-5585

各地の展覧会

開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

◆人間国宝　松田権六の世界
12月19日～2月25日まで
東京国立近代美術館 工芸館
東京都千代田区　TEL 03-5777-8600

◆麗しの日本　日本画と漆工芸の美
1月2日～2月25日まで
メナード美術館
愛知県小牧市　TEL 0568-75-5787

◆揺らぐ近代　日本画と洋画のはざまに
1月10日～2月25日まで
京都国立近代美術館
京都市左京区　TEL 075-761-9900

2月の行事案内

《入場無料（ギャラリートークを除く）・いずれも午後1時30分から行います》

月　日	行　事	内　　容	会　場
2/ 3（土）	キッズ☆鑑賞講座	明治の工芸を鑑賞しよう	講義室
2/ 4（日）	月例映画会	壁画よみがえる　法隆寺金堂壁画再現の記録　（44分）	ホール
2/10（土）	ギャラリートーク	能面と能装束　（村上尚子学芸主任）	第2展示室
2/11（日）	ビデオ鑑賞会	①正倉院宝物29　秘宝　公開への道　（33分） ②正倉院宝物30　未来への継承　（32分）	ホール
2/17（土）	美術講座	染付・色絵の人物文様　（北澤　寛学芸主査）	講義室
2/18（日）	月例映画会	①竹工芸　飯塚小玕斎　（30分） ②独学の指物師　ー木工芸ー「氷見晃堂」　（25分）	ホール
2/24（土）	美術講座	デューラー　人と芸術　（織田春樹学芸主査）	講義室
2/25（日）	ビデオ鑑賞会	①正倉院宝物30　未来への継承　（32分） ②東大寺　行事篇　春を招くお水取り　（29分）	ホール

所蔵品紹介 174

作者の祖父である初代徳田八十吉は、古九谷の重厚な釉調を深く研究し、ついにその再現に成功しました。この作品の名称にある「深厚釉」とは、初代八十吉が古九谷の釉薬を総称する際に用いていたものとのことです。

三代徳田八十吉氏は、初代からこの古九谷の釉薬技法を伝授されました。そして同氏の作風でまず注目される点は、古九谷のコピーとは、はっきりと決別し、具象的な絵を一切描かないことです。この点について同氏は、若い時代に具象から完全抽象に至る論理に深く共感したことから、九谷に描かれる絵は抽象でなければならないと思い至ったと述べておられます。

この作品には、そうした徳田氏の姿勢がよくあらわれています。全体の調子は三彩を意識したようですが、口から流れる鋭い線画は極めて現代的であり、また釉の調子も、鉛釉の調合によって微妙な味わいの違いを生んでおり、その味わいは是非ご来館いただいて、実際に作品をご覧になって実感していただきたいと思います。徳田氏は、様々な制作と研究によって、酸化金属の調合の違いや温度の変化で、釉に様々な表情を出す技を開発し、次々に新たな境地を開いておられますが、この作品からはそうした氏の意気込みが強く感じられます。（現在、第5展示室で開催中の「伝統九谷焼工芸展30年の精華」で展示しています。）

深厚釉線文壺（しんこうゆうせんもんつぼ）

三代徳田八十吉（さんだいとくだやそきち）

昭和58年（1983）

第7回伝統九谷焼工芸展大賞

口径1.5　胴径35.0　高34.4（cm）

ミュージアムショップ通信

好評を博して参りました「石川義 展」もあと僅かとなりました。今まで石川氏をよくご存じなかった方でも、今回の展観を機にファンになったという方が多くおられたようです。氏の画業を一堂にご覧いただける、またとない機会です。まだご覧になっていない方はもちろん、もう一度ご覧になりたいという方も是非ご鑑賞頂きたく思います。きっと新しい発見があるものと思います。

さて、ショップからは根強い人気を持つ「古九谷写飾皿」の紹介です。当館所蔵の古九谷作品を手描きで縮小模写し、古九谷と同じ釉薬で再現したものです。人気の「色絵鳳凰図平鉢」も含め、全七種の商品が出揃いました。この機会に是非、間近にご覧下さい。

左から
青手樹木図、色絵布袋図、色絵牡丹文、
色絵鳳凰図、青手老松図、色絵石畳双鳳文、
青手椿図　　各7,000円

次回の展覧会

前田育徳展示室	特　集 **天神画像と文房具** 3月7日（水）～3月25日（日）
第2展示室	特　集 **美術にみる文学の世界** 3月7日（水）～3月25日（日）

休館日：2月5日（月）～2月7日（水）

石川県立美術館だより　第280号
2007年2月1日発行
〒920-0963　金沢市出羽町2番1号
TEL 076（231）7580　FAX 076（224）9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています